

独思録：「突如、羽田ハブ空港構想」(10/18)

小西 秀俊

[esq-info@esquare-kamakura.net](mailto:esq-info@esquare-kamakura.net)

鳩山新政権が発足してから1ヶ月が経ちました。

新政権は世論調査で高い支持率を保ち、外交では環境問題で大きなメッセージを発し、国内ではマニフェストにもとづく施策を地元や官僚への根回しなしに打ち出すなど、政権交代を実感させる光景が次々に国民の前に現れた1カ月でした。

米国では、発足するや100日間の特別議会で15本のニューディール法案を一気に通したF・ルーズベルト政権の故事から、「ハネムーンの100日」といわれ、当面は新政権のやることを見守るそうです。

個々の政策メニューを示した段階で、早速「あちら立てればこちらが立たず」の現実にあちが当たっています。

既に、メディアが主導し、結果が問われる「政治主導」というわりに施策の優先順位を示す将来ビジョンが見えないと、言い始めています。

豊島与志雄に「新時代の童話」というエッセイがあります。

「それを二十世紀的と云おうと、現代と云おうと、或は新時代と云おうと、言葉はどれもよろしいが、過去と現在との間に一種の距離を感じ、歴史の必然的なるべき推移のうちに一種の飛躍を感ずる、そういう時代に吾々は在る。」

から始まり、

「かかる境地に、近代のハムレットを置いてみるがいい。 「近代の」という形容を冠した所以は、それがもう過去のものとなりつつあるからである。

..... <中略>.....

行動は限定であり、一つのものを選択することは他の無数のものを捨てることであるという思想、初期のジイドなどの思想とも、関連を持っている。斯くて、何か一つの欲望が欲望されるという歎声になる。

このハムレットを、上述の境に置いてみるがいい。彼は後方を振り向いて眺め、また前方を凝視し、そして其処にいつまでも佇んでいるだろう。

..... <中略>.....

だが、ハムレットのほかに、現代のドン・キホーテがいる。 「現代の」と云う所以は、漸くそういう型が出来かかって来たからである。彼は絶大なる信念を持っている。行動に対する信念を持っている。そしてこの信念は、思惟に対する反撥から来り、思惟の拒否を結果する。だからその信念は、行動の目的にはなくて、行動そのものに在る。」

と続きます。

新政権の現状は、まさに、ハツ場ダムではハムレットの心境であり、環境問題ではドン・キホーテの心境でしょう。

更に、其処に、ハムレットとドン・キホーテ双方を一度に演じ分けなくてはならない問

題を、突如、国土交通大臣が提起したため、関係地方自治体は大騒ぎになっています。

内容は、羽田空港を24時間稼働する国際拠点（ハブ）空港として、最優先で整備していくということです。来年10月に4本目の滑走路ができるのを機に、「国際線は成田、国内線は羽田」という原則を取り払い、羽田発着の国際線の便数を大幅に増やし、利便性の高い、都心に近い羽田の拠点空港化を選択したということで、当然のことと思います。

いつまでも「国際線は成田、国内線は羽田」にこだわっているのは、日本がアジアの航空ネットワークから外れる危険性は大きいです。羽田は拠点空港として十分機能させねばなりません。

国土交通大臣は、「成田は引き続き国際空港として活用する」とか、「関西空港を西日本のハブに」との提案に配慮の様子を見せています。

しかし、今後の空港行政には、拠点空港の競争力強化と地方空港の整理や廃止という「選択と集中」が求められています。すぐさま関連自治体に配慮を示すのではなく、きちっとビジョンを示して、今までのように誤った空港行政から決別して欲しいものです。



#### 毎日：「羽田ハブ空港化：国交相と森田知事会談 鳩山首相が評価」(10/14)

鳩山由紀夫首相は14日、羽田空港のハブ空港化を打ち出した前原誠司国土交通相と森田健作千葉県知事との会談結果について「意見の一致を見た」と評価した。そのうえで、前原氏が成田、羽田両空港に関して述べた「ウインウイン（共に勝つ）」になぞらえ、「関空も含めて『ウインウインウイン』の関係を作ることができる」と述べ、関西空港のハブ化を求めた橋下徹大阪府知事への配慮を示した。

前原氏の発言に「地元への説明がない」などと関係自治体の首長から反発が出ていることについては、「かわりのある皆様の声を公平公正に聞く必要がある。単に首長さんだけという話ではない」と指摘。「より幅広く多くの方々の意見を聞ける仕組みが必要だ」と語った。

< 豊島与志雄 (1890-1955) >

小説家、仏文学者。福岡県朝倉郡福田村大字小隈生まれ。東京帝国大学文学部仏文科卒業。処女作となる「湖水と彼等」で注目される。『レ・ミゼラブル』の翻訳がベストセラーになり、翻訳が主で創作が従のような生活が続く。



法政大学法文学部教授、明治大学文芸科教授河出書房の編集顧問など歴任、代表作として、小説『野ざらし』『白い朝』、随筆集『書かれざる作品』ほかに、数多くの児童文学の

作品を書いているが、翻訳の『レ・ミゼラブル』『ジャン・クリストフ』などで、作家というより、名訳者として名を残した。

### 春秋：「戦略を誤った空港行政」(10/16)

おお、こんなところに身を潜めて……。などどもの哀れを誘うのが羽田空港の国際線ターミナルだ。きらびやかな国内線ビルからしばしばバスに揺られ、たどり着く先は小さな2階建ての屋舎。ひなびたローカル空港に来たようである。

ソウルや上海にチャーター便が飛んでいるからなかなか便利なのだが、往年のハネダの栄華は影もない。とっていたら時代はまた大きく動き、ここを再び国際化してハブ（拠点）空港にする方針が急浮上してきた。新しい滑走路ができて使い勝手が一段とよくなる羽田を生かすのは理にかなった選択に違いない。

さりとして成田空港の立場もあろう。あの流血の反対運動を超え、ようやく開港した傷もうずくというものだ。前原誠司国土交通相は「両空港を一体的にとらえて合理的にすみ分ける」と説くけれど、実際にどう振り分けるかとなれば悶着（もんちゃく）は避けられない。戦略を誤った空港行政の、これも厄介なツケというべきか。

羽田の国際線ビルが空港の片隅に身をやつしているのも、じつはあと1年ほどだ。来秋には新滑走路の完成に合わせ、モノレールの駅に直結した本格的なターミナルが誕生する。片や成田も新しい高速鉄道で都心と36分で結ばれるという。どちらが兄か弟かは分からないが、この双子をうまく並び立てる術（すべ）がいる。

#### < 成田空港流血反対運動 >

成田国際空港を建設するに当たって発生した社会問題で、いわゆる三里塚闘争こと。

1966年佐藤栄作内閣は、建設予定地を当初の千葉県富里村（現・富里市）から、用地買収がより容易に進むと考え、宮内庁下総御料牧場がある同県成田市三里塚に変更した。

しかし、地元農民は「三里塚・芝山連合空港反対同盟」を結成し反対活動を開始し、当初は日本社会党や日本共産党などの革新政党も支援・援助しての反対運動だったが、革新政党に代わって、「暴力革命」を掲げる新左翼諸党派が反対派農民を支援、1971年土地収用法に基づく第二次代執行では警察官3名が死亡（東峰十字路事件）、ようやく一期工事の用地を取得した。

反対派は1972年に航空妨害を目的とした鉄塔を建てて対抗したが、1977年鉄塔を撤去、反対派と機動隊が衝突、機動隊員の放ったガス弾を至近距離で頭部に受けた支援者が死亡した。



### 天声人語：「寝耳に水」(10/15)

羽田から飛びたった定期航空の第一便には、中国・大連のカフェーに届けられるスズムシとマツムシ計6千匹がおさまっていた。人間のお客は一人もいない。出来たばかりの航空会社がやっと探した大事な「客」だった。1931(昭和6)年のことである。

時は流れて、いまや1年の利用者は6500万人にのぼる。世界でも4位というにぎわいだが、国際線はごく少ない。「国内は羽田、国際は成田」と棲(す)み分けてきたからだ。その原則をやめる、という前原国土交通相の発言が波紋を広げた。

発言は日本の表玄関をうたう成田には「格下げ通告」に聞こえる。流血の反対闘争の末に開いた空港である。苦渋の思いで受け入れてきた地元が、はしごを外される思いになるのは無理からぬことだ。

成田は66年に閣議で建設が決まった。民主主義にもとる寝耳に水の決定が、こじれにこじれる原因になった。いわゆる「ボタンのかけ違い」である。今回の大臣発言にも、またぞろ「寝耳に水」という憤りが聞こえていた。

きのうは千葉県の森田知事にねじこまれた。アジアの空を眺めれば「羽田を国際拠点に」という方針は理がある。だが「歴史認識」は甘かったのかもしれない。ハツ場(やんば)ダムといい、どうも就任以来の前原さん、連綿たるアナログである人の営みに、デジタル的に対処したがる傾きはないか。

秀才は2点間の最短距離を探すのがうまい。それが正しいとも限るまい。老婆心ながら、ときに定規を手放した方が、政治という「可能性の芸術」を描きやすいこともあろう。

### 読売教育欄：「寝耳に水」(8/20)

人気俳優が麻薬取締法違反の疑いで逮捕されたのに続き、元アイドル歌手の女優(idol singer-turned-actress)が数日間の失踪(しっそう)後、警察に出頭し、覚せい剤取締法違反容疑で逮捕されました。海外でも人気がある女優の清新なイメージ(pure and innocent image)と、覚せい剤所持容疑とのギャップに衝撃を受けた人も多かったでしょう。



俳優の逮捕後、外外である妻の所属事務所が「寝耳に水の状態」とコメントを発表しました。「寝耳に水」とは「思いがけない出来事」(unexpected event)や「全くの驚き」(total surprise)のことです。コメントを英訳すれば、His arrest came as a total surprise to us.(彼の逮捕は寝耳に水だった)となります。

また、a bolt from the blue(青天のへきれき)という慣用句もあります。青空に突然稲妻(bolt)が走るような、不意の出来事を形容する場合に用いられます。例えば、A report about a merger between the two major banks was a bolt from the blue.(大手銀行2行合併の報道は青天のへきれきだった)のような英文が可能です。

信じられない話を聞いた時に「耳を疑う」と言いますね。英語でも同様に、doubt one's

ears と表現します。例えば、I doubted my ears when I heard that actress Noriko Sakai was using stimulants. (女優の酒井法子が覚せい剤を使用していたと聞いて、耳を疑った)のよう  
に使います。

今回逮捕された両容疑者も、自分の良心に耳を傾け(consult one's conscience)ていれば、  
ファンの声援を裏切るような結果は避けられたのではないのでしょうか。

### 編集手帳：「国際拠点（ハブ）空港」（10/14）

子供のころ、誰もが口ずさんだ唱歌「オウマ」は林柳波が作詞した。オウマノ オヤコ  
ハ/ナカヨシ コヨシ/イツデモ イッショニ/ポックリポックリ/アルク...

読売新聞文化部「愛唱歌ものがたり」（岩波書店）によれば、柳波は幼い娘を連れて千葉県成田市の三里塚御料牧場に遊んだとき、想を得て「オウマ」の原詩を書いたという。歌の舞台はいま、成田空港になっている。

前原国土交通相が、羽田空港を国際拠点（ハブ）空港にする意向を表明した。「国際線は成田、国内線は羽田」という原則は取り払うという。

羽田と成田、“空港の親子”がポックリ、ポックリ仲良く歩いているうち、日本は国際空港の実力で韓国や中国に大きく水をあけられた。国家戦略として1頭を外国に太刀打ちできる競走馬に育てようとするとき、都心に近く利便性の高い「羽田」を選んだ判断は間違っていない。

お馬の親子が似合う成田の田園風景が空港に姿を変えるまでには、激しい反対運動があり、血も流れた。「これからは脇役で」と告げられても、地元は戸惑うだろう。前原氏が情理を尽くして語るしかない。

< 林柳波（1892-1974） >

詩人。本名林照壽。群馬県沼田市生まれ。明治薬学校（現・明治薬科大学）卒業。明治薬科大学図書館長、日本詩人連盟相談役、日本音楽著作権協会会員などを歴任。



野口雨情の影響で再び詩作を行うようになり、童謡運動に参加。「まぼろしの泉」で作詞家デビュー。その後、『ああ我が戦友』『野営の夢』などの軍国物から、『田植歌』『お六娘』などのオペラを幅広く作詞。

代表作に『オウマ』『ウミ』『うぐいす』『羽衣』、『スキーの歌』など。他に『春の小川』（高野辰之作詞）の口語訳や『たなばたさま』（権藤花代作詞）、『港』（旗野十一郎作詞）の補作などでも知られる。

### 余禄：「羽田ハブ空港化構想」(10/14)

技術者の格言に「車輪の再発明はするな」というのがある。古くから確立した技術を見落として、一から同じようなものを作るなということだ。「四角い車輪の再発明」という言葉もあり、車輪の再発明に挑んだあげくに役に立たぬものを作り上げることだ。

まさに古代の一大発明である車輪だが、その軽量性と耐衝撃性を飛躍的に高めたのが何本かのスポーク（輻<や>）で輪縁を支える構造の発明である。このスポーク車輪は紀元前2000年ごろからオリエント一帯で作られるようになったという。

「ハブ」は車輪の中央にあって何本ものスポークを集めて支え、車軸を通す穴のある部分だ。日本語では「轂(こしき)」という。ハブは転じて活動の中心を指すようになったが、「ハブ空港」の場合はスポークの一本一本を航空路と考えればいい。

いわば国際的な航空ネットワークの中心拠点を意味するハブ空港である。前原誠司国土交通相が明らかにした羽田空港のハブ空港化とは、来年10月の第4滑走路の完成を機に国際線と国内線とが乗り継ぎできる空港にしていく構想だという。

ソウルや香港などアジアのハブ空港との国際競争で立ち遅れが目立つ日本である。乗り継ぎなどで乗客の不満も少なくない中での前原発言だ。だが過去の空港建設のいきさつを抱える成田空港の地元からは、羽田への国際線大幅振り分けに猛反発の声が出るのもこれもまた仕方ない。

どうも採算のとれぬ空港はどんどん造るが、ハブもスポークも発明以前とったおもむきのわが航空行政だった。さて成田空港も上手に活用するという国交相の羽田ハブ空港化構想、ちゃんと回るかはこれからの細工次第だ。

#### <ハブ空港>

各地に放射状に伸びた航空路線網の中心として機能する、「拠点空港」を意味する言葉で、航空路線網を自転車などの車輪に例えると、車輪のスポーク部分が「航空路」、ハブ部分が「空港」にあたることからこの名称がついた。

東アジアの拠点空港を例にとると、成田国際空港は1978年の開港以来、東アジア諸国と北米諸国を結ぶ航空便の多くが発着する拠点空港として機能してきた。

しかし、1990年代以降、同空港が急速に混雑化したこと、拡張計画は反対派の存在もあり遅々として進まないこと、当初より都心と距離があり利便性に難があること、航空機の性能が向上して航続距離が伸び北米から成田以遠への航行が可能になったこと、そして大型機の離着陸に必要な長い滑走路を2本備えた香港国際空港と仁川国際空港が1998年と2001年に次々と開港したことなどもあり、今日では成田の拠点空港としての地位は急速に揺らぎ始めている。

